

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国英語教育研究団体連合会

（代表者 塩 崎 勉 会員数 約 60,000 人）

T E L 03-3267-8583

1 前 文

大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）を利用する大学の数は、643 大学（国公立大学 156、私立大学 487）となった。これに、短期大学 154 を合わせると、実に 797 の大学・短大に出願する生徒がセンター試験を受けている。今年度の「英語（筆記）」の受験者数は、昨年よりも増えて 501,266 名であり、これはセンター試験受験者全体の 98.7%に当たる。この数字からも推測できるように、ほとんどの受験者にとってセンター試験の「英語（筆記）」は必須科目となっている。英語の成績で、受験者の大学合否が大きく左右される。それだけにセンター試験の「英語」の出題内容は、受験者をはじめとする多くの人たちの関心事となっている。またこの試験は中学校・高等学校の英語教育のあり方にも影響を与えている。高等学校卒業までにどのような学力を身に付けさせるべきかの指針の一つとなっているのがセンター試験なのである。

出題に当たっては、影響力の大きさを考えて、慎重の上にも慎重を期していただきたいと要望するものである。今年度の本試験と追試験ではともに、問題文中のある単語につづり字（スペリング）の間違ひがあるという単純なミスが発生した。試験終了後発表されたが、今後は極力このような訂正をしなくてすむように対策を立てていただきたい。

本稿では、センター試験「英語（筆記）」の検討を行う。

さて今年度（平成 21 年度）は、内容・形式において昨年を踏襲したもので、過去 2 回（19 年度、20 年度）ほどの大きな変化がなかったことが特徴と言えれば特徴であろうか。形式がほぼ一定していることは、受験者に過度の不安感を与えることもなく、好ましいものだ。

昨年とは若干、変化している問題を指摘しておく。まず、第 1 問 B のアクセント問題では、従来の形式が復活した。昨年のような大小の黒丸を使ったものではなく、標準的な形式でアクセントの位置を尋ねる問題になった。今回の形式はアクセントの異同をすべての単語について確認させる点で、より優れた問題形式である。第 1 問 C は、ある 1 語を強調して読んだ場合の話者の意図について聞いたものだが、これが昨年の 3 題から 1 題に減っている。昨年、本稿で指摘しておいたように、この問題形式には疑問が多くあるように思われる。代わりに、第 1 問 D が新傾向の問題として加えられた。強く発音する部分を正しく黒丸で示しているものを選ばせている。これを発音問題としてとらえるか、単に発音に関する知識を見る問題とみなすかは意見の分かれるところだが、語のアクセントだけではなく、文全体にも目を向けてイントネーションに注意を喚起しているのは良い傾向と言えよう。だが、法則性を覚えれば解答を導けるので、この形式の問題を長く続けていくには無理があるように思われる。

そのほかの変更点は大きなものではない。気付いた 2 点だけ指摘する。第 2 問 B の対話完成問題では会話がやや長くなっている。第 2 問 C の語順整序の前に詳しい状況説明文がついた。予測がで

きて受験者には取り組みやすくなった。

また変更されずに残った問題のなかでも、ここしばらくは形式を保持していただきたい良い問題をあげる。第3問Aは、未知の単語の意味を文脈から考えさせる問題である。第3問Bは、ディスカッションの内容を要約する問題。第4問Bは、実用的な英文で、必要な情報を素早く読み取るスキニングの能力を要する問題。第5問は、絵を見て説明文を選ぶ問題。第6問は、論説文を読み解き、段落構造を考える問題。センター試験が筆記試験であるため「読むこと」に特化されているとは言え、高等学校学習指導要領に書かれている「実践的コミュニケーション能力」とはどういうものであるかを具体的に示した設問形式で、良問であると評価したい。受験者の立場でも、昨年と同様の問題形式で出題されたことで対策を立てやすかったのではないだろうか。

全体的に読ませる英文量はかなり多く、速読力が求められている。また設問の趣旨に合った読み方をしなければ時間が足りなくなる。一律な英文の読み方をするのではなく、素材となる英文の種類や目的に応じて様々な読み方をする必要がある、とのメッセージがよく伝わってくる問題形式である。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 音声についての設問である。A単語の発音、B単語のアクセント、C文強勢の意図を尋ねる問題、D文強勢の位置を尋ねる問題で構成。昨年よりも問題数は減ったが、Dに新傾向の問題が加わった。C・Dの配点が上がり、全部で16点の配点は同じ。難易度は昨年並み。

A 発音の識別の問題で、母音に関するものと子音に関するものが適度に配分されている。選ばれた単語はいずれも標準的だが、問1では受験者の苦手な母音の正確な発音が問われていて、かなり難しい。長母音とあいまい母音の区別など受験者はふだん意識せずに発音しているところだろう。問2、問3は基本的。

正しい発音を知ることは極めて重要である。学校の授業でも実際に指導している。発音問題は、正しい発音を心掛けるという意識付けの効果は期待できるが、例年どおり、ペーパー上で発音問題ができて、その受験者がきちんと音声化できる保証にはならないことだけは指摘しておきたい。

B 昨年のようなアクセントの「強弱」を黒丸で表す方法を改め、今年は、従来どおり、並んでいる単語の中から、同じところに第一強勢がくる語を選ばせる形式へと戻った。すべての単語のアクセントを確認して答えを導くようにさせている点で、この方がよいと思われる。

ただし、これは、単語を音節に区切ることが前提となる問題である。学校現場で、音節の概念までも十分に指導できているとは言い難い。多くの受験者は「何となく前の方に(真ん中あたりに)(後の方に)アクセントがありそうだ」と勘に頼って、この問題に答えたことは十分に予想される。3音節しかない問1はできて、問2は4音節の長い単語なので、かなり混乱したと思われる。音節の区切りを明示してもよかったのではないか。

C 3年連続でここには「文中のある語を特に強調して発音した場合、話者が伝えようとした意図は何か」を尋ねる問題が置かれている。ただし、例年よりも問題数を減らして1題のみとなった。昨年も述べたように、1文で示された範囲内で状況を特定することができるかどうかは、はなはだ疑問であると言わざるを得ない。

「特に強調した場合、話者が伝えようとしたことは…」とのただし書きはついているが、今回の **math homework** は「名詞＋名詞」の連語である。前の名詞にアクセントを置いて発音するのは状況がどうであろうと同じである。内容語である **math** という単語がはっきりと発音されるのは、意図のいかんにかかわらず、ごく自然なことのようと思われる。したがって、この場合の話者は、本来強調されてしかるべき語にさらに強調を置いて発音したことになって、これを想像してみると極めて不思議なイントネーションでこの文を発言したことになる。この問題の設定そのものに疑問を感じるゆえんである。

なお、第1問は音声についての問題となっているが、C、Dは解釈力を見る問題とみなされる。

- D 新傾向の問題で、発音を個々の語単位でなく、文全体でとらえさせようとする観点は好ましい。弱形で読むべき代名詞・接続詞などを、間違っ**て**強く読んでしまったり、いつも平板なイントネーションで読んだりする英語学習者は多い。この問題では、そのような学習者の苦手なところをついており、イントネーションにもっと意識を向けさせる意味では良問である。ただし前文にも書いたような問題点（発音の法則を知っていれば解ける。）を含んでいることを指摘しておきたい。

第2問 Aは文法・語法を中心とする問題。Bは対話文完成。Cは語順整序問題。昨年と形式は同じ。

A 文法と語法の両方に等分に比重が置かれたバランスの良い配置となっている。この中で、受験者の立場から言うと、文法問題は比較的取り組みやすいものだ。しかしながら、語法に関しては、日ごろからたくさんの英文に触れ、語感を養っておく必要がある。今回の問題でも、語法に関するものがかなり手ごわく、決して易しくはない。語感を試す良い問題が多いという印象を持った。

B 対話を読んで、空所を埋める問題である。対話文が少し例年より長くなって、展開が分かりやすくなっている。慣用表現が多く使われているのも今回の特徴。よく練り上げられた設問で、受験者とすれば慣用表現が思わぬ落とし穴となって、ミスを犯すことになったかも知れない。

C 昨年までと違って、語整序の前に状況を説明する文がついた。これは語を並べかえる上でのヒントになっているので受験者は取り組みやすい。マークシートという制約上、作文力そのものを測っているとは言えないが、文の構成力を見る上では妥当な問題である。

第3問 Aは短い文章の中から、未知の表現や単語の意味を文脈から考えさせる問題、Bは3人の生徒の意見を読んで、それぞれの要約文を選ばせる問題、Cはパッセージの空所に文を入れてパラグラフを完成させる形式である。

第3問はそれぞれに問題のねらいも明確で工夫された設問である。分量が多く、速読力を試される。受験者にとって楽ではないが、取り組みやすい設問形式である。

A 下線部の意味をそこまでの内容を十分に踏まえて推測しなければならない。全体の文脈が分かれば、そこから未知の部分を推測することができることを示した良い問題である。

B 友人関係についての議論である。友人は数が多い方がよいという意見、大切なのは数ではなくて質であるという意見などが述べられる。発言者の論旨も明快であるので、解答に当た

って迷うところはなく、取り組みやすい問題と言えよう。今年も、日常生活の中の身近な話題を取り上げている点は好ましい。

- C 英文は読みやすく、読解力や論理構成力を見るのに適した問題である。選択肢を選ぶに当たってそこまで読んできた内容をきちんと理解していなければ答えられない。一つだけ疑問に思ったのは、問 32 の文は、本来第 2 段落の冒頭に持ってくるべきではないか、という点である。一つの段落には一つのテーマを、というのはパラグラフ・ライティングが教えるところである。問 32 の文はココア生産者の窮状を述べた第 1 段落に入れるべきではないと思われる。第 2 段落の冒頭に置いた方がよい。

第 4 問 A はグラフと英文を組み合わせて情報を読み取る問題。選択肢に迷うところがなく解答しやすい。B は医療機関で診察を受ける前に書いた書類を速読して必要な情報を的確につかむ問題。A は英文の細部まで正確に読み取ることが必要な問題だが、B では、必要な情報だけを読み取るスキニングが有効であろう。英文の種類に応じて様々な読み方が必要になることを示唆する点で有益である。

A 論説文を読み取らせる問題。また、1989～2006 年までの間にブラジルの熱帯雨林の面積の増減を表すグラフにも重要な情報がある。正確でスピーディーな解答処理能力が求められている。問題本文・選択肢ともよく練られた問題である。

B 設問が先に置かれているので、必要な情報のみを探す気持ちで読んでいけばよいことが分かる。病名など難しい語いも含まれているが、解答にかかわるところは、なじみのある単語なので取り組みやすい。目的によって読み方を変える必要があることがよく伝わってくる設問形式である。

第 5 問 A と C は与えられた絵や漫画を見て、その様子を記述した文を選ぶ問題。B は記述内容に合うイラストを選ぶ問題。形式は異なるが、問題のねらいは、正確な英文読解力である。

A 鼓笛隊の隊長のユニフォームを説明文の中から正確に描写したものを選ばせる。選択肢の英文はよく練られている。

B 先に英文が示されてその内容に合う絵を選ぶ問題。様々な橋の構造を扱ったもので、内容になじみがなく、戸惑った受験者がいたかもしれないが、丁寧に読んでいけば他の絵と差別化できるキーポイントが見つかる。この英文で使われている語いはかなり高度で、語い力と読解力で差が出てくる問題である。

C 漫画のストーリー展開を述べた記述文を選ぶ問題。選択肢の英文がそれぞれに長く、速読して答えを見つけなければならない。

第 6 問 長文の論説文で、中心となっているテーマは「英英辞典の効用について」である。論説文と言っても、個人の随想から始まっているので英文は読みやすくなっている。受験者にとっては英語学習という身近な話題で、自分の体験と照らし合わせて読むことができたと思われる。大学入試レベルから考えて、無理のない標準的な出題内容であった。ただしこの英文もかなりの長文で、選択肢も合わせて読まなければならないことを考えると、かなりのスピードで読むことが要求されている。このことから、細かい事実にとらわれるような精読法ではなく、論旨の大筋の流れを見失わずに概要をきちんととらえた読み方を促している、と受け止められた。

3 ま と め

本稿ではセンター試験「英語（筆記）」を検討してきた。今回の問題は、全体として問題形式・内容で大筋において昨年と変わってはいない。英文は標準的なレベルで極めて素直な出題であった。受験者に様々な課題（タスク）を設定して、それらがバランス良く配置され、英語力を多面的に測定している。また本文・選択肢を合わせるとかなりの分量の英文を読ませていることになる。すべてを制限時間内に解答するためには高度な処理能力も必要になってくる。受験者にも学校現場にも、英語を読むときに、いつも一律な読み方をするのではなく、素材に応じて読み方を変えることの重要性が理解されてくるものと思われる。今後とも、センター試験では、高等学校の学習内容を理解している受験者ならば十分に対応できる出題をされるよう要望しておきたい。